

## 鹿児島県南さつま市沖から得られたワモンイトヒキヒイラギの国内 2 例目の記録

鈴木 啓<sup>1</sup>・木村清志<sup>2</sup>

## Author &amp; Article Info

<sup>1</sup> ノリタケ株式会社 (名古屋市)

late01a61axhir0mae119@gmail.com (corresponding author)

<sup>2</sup> 三重大学 (津市)

kimura-s@bio.mie-u.ac.jp

Received 13 April 2025

Revised 17 April 2025

Accepted 17 April 2025

Published 18 April 2025

DOI 10.34583/ichthy.54.0\_45

Hiromu Suzuki and Seishi Kimura. 2025. Second Japanese record of *Equulites oblongus* (Acanthuriformes: Leiognathidae) from Minami-satsuma, Kagoshima, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 54: 45–48.

## Abstract

A single specimen of the Oblong Ponyfish *Equulites oblongus* (Valenciennes, 1835), distributed in India, Sri Lanka, Thailand, Malaysia, Philippines, Indonesia and Japan, was collected from the coast of Minami-satsuma, Kagoshima Prefecture, Japan. In Japanese waters, the species has previously been recorded only from Tanega-shima island, Kagoshima. Therefore, the present specimen from Minami-satsuma represents the second record of the species from Japanese waters.

ヒイラギ科イトヒキヒイラギ属 (Leiognathidae: *Equulites* Fowler, 1904) は、これまで 9 有効種が知られており、日本には「イトヒキヒイラギ」*Equulites leuciscus* (Günther, 1860)、ヒメヒイラギ *Equulites popei* (Whitley, 1932)、およびオキヒイラギ *Equulites rivulatus* (Temminck and Schlegel, 1845) の 3 種が生息すると考えられてきた (Suzuki and Kimura, 2023)。Suzuki and Kimura (2023) は本属の標徴および帰属する有効種を包括的に再検討し、その結果 10 有効種を認め、イトヒキヒイラギ *Equulites berbis* (Valenciennes, 1835)、ナンカイイトヒキヒイラギ *Equulites leuciscus*、ワモンイトヒキヒイラギ *Equulites oblongus* (Valenciennes, 1835)、ヒメヒイラギ、オキヒイラギ、およびオキナワイトヒキヒイラギ *Equulites ryukyensis* Kimura and Suzuki, 2023 の 6 種を日本沿岸から報告した。

2024 年 11 月に、鹿児島県南さつま市沖から、1 個体の

ワモンイトヒキヒイラギが採集された。本種の国内における記録は、これまで種子島からのみであり (Suzuki and Kimura, 2023)、本標本は本種の国内における 2 例目の記録となるため、ここに報告する。

## 材料と方法

計数および計測方法は Suzuki and Kimura (2023) にしたがった。標準体長は体長と表記した。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行い、計測値は体長と頭長に対する百分率で示した。性別は右側腹壁を切開し、生殖腺の観察によって決定した。生鮮時の体色はカラー写真に基づいて記載した。本研究に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており、上記の写真は KAUM のデータベースに登録されている。

*Equulites oblongus* (Valenciennes, 1835)

## ワモンイトヒキヒイラギ

(Fig. 1; Table 1)

**標本** KAUM-I. 213644, 体長 99 mm, 雌, 鹿児島県南さつま市笠沙町松島北東沖 (31°25'06"N, 130°12'32"E), 水深 20 m, 2024 年 11 月 21 日, 定置網, 伊東正英。

**記載** 計数形質と体各部の体長と頭長に対する割合を Table 1 に示した。体は卵形で側扁する。体の輪郭は背腹が同程度に膨らむ。頭部背縁の輪郭は吻端から眼の上方まではほぼ直線状に上昇し、眼の上方から項部にかけてやや盛り上がる。吻端はやや尖る。口は端位で前下方に突出する。口裂はほぼ水平。下顎腹面の輪郭はわずかに湾入する。両顎歯は小さく柔毛状。主上顎骨後端は眼窩前縁をとおる垂線をわずかに超える。眼前棘は浅く 2 又する。眼窩上縁は平滑。両眼間隔は眼窩径とほぼ同長。前鰓蓋骨下縁は弱い鋸歯状。第 1 鰓弓の各鰓耙は最長の鰓弁よりも短い。鰓腔後縁の肩帯中央部に 2 小肉質突起があり、上部の突起は下部の突起よりも小さい。鱗は円鱗で小さい。頭部は全域が無鱗。躯幹部および尾部はほぼ完全に被鱗するが、胸鰭

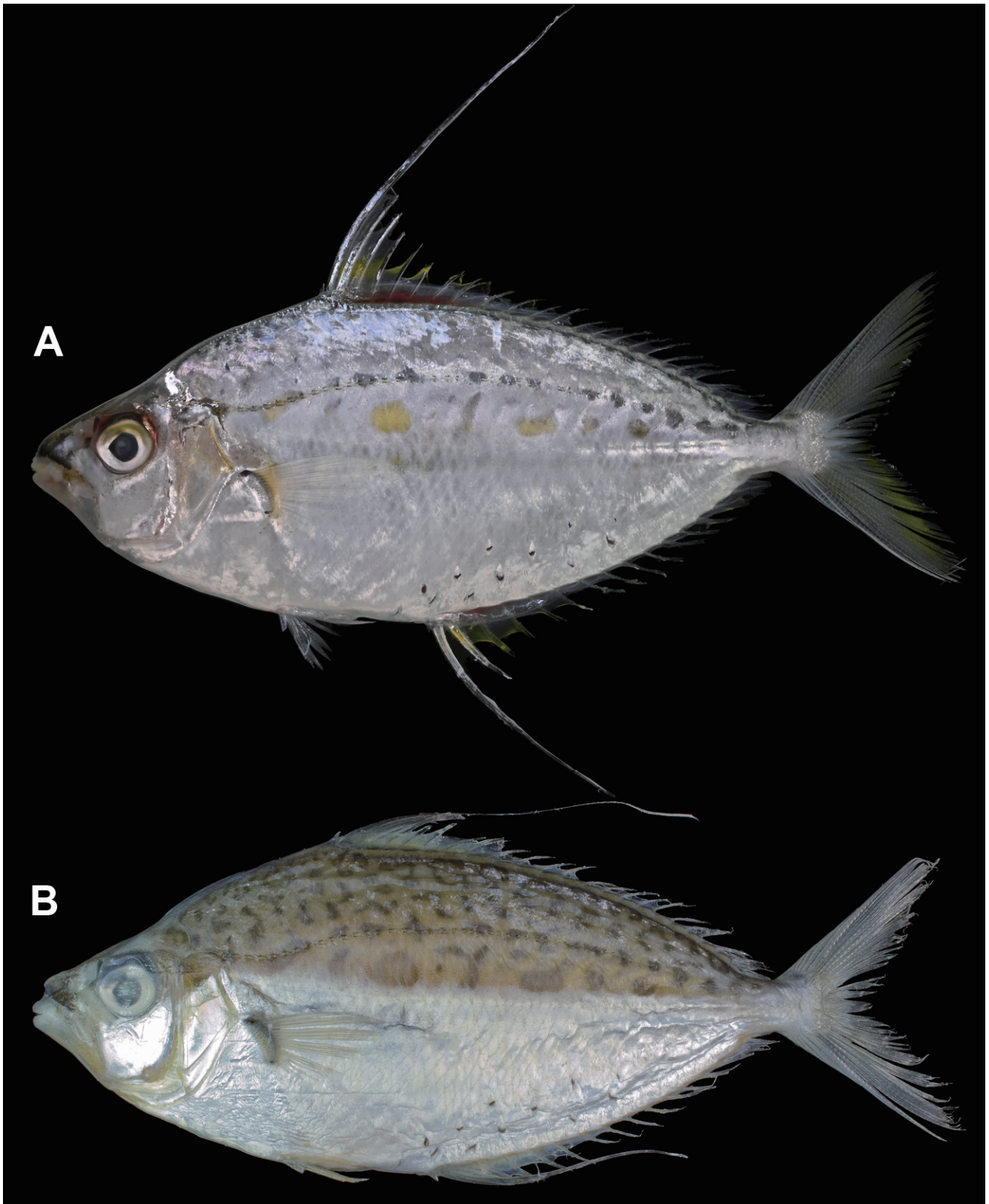


Fig. 1. Fresh (A) and formalin fixed (B) specimen of *Equulites oblongus* (KAUM-I. 213644, 99 mm SL), collected from Minami-satsuma, Kagoshima Prefecture, Japan.

基底部とその前方の体側面、および峡部から臀鰭始部にかけての体腹面は無鱗。胸部被鱗域の前端は鰓蓋縁における間鰓蓋骨と下鰓蓋骨の接合陥入部をとる垂線より前方に達する。側線はほぼ完全で尾鰭始部をとる垂線を越えるが、尾鰭基底には達しない。背鰭は8棘16軟条。臀鰭は3棘14軟条。背鰭棘および臀鰭棘は側扁し、弱く、両

鰭とも第1棘が最短で第2棘が最長。背鰭第2棘および臀鰭第2棘は著しく伸長する。倒した背鰭第2棘の先端は第12軟条基底に達し、臀鰭第2棘は第9軟条基底を越える。背鰭第3、第4棘および臀鰭第3棘の前縁は基部近くで鋸歯状となる。背鰭および臀鰭基底の前半部は鱗鞘に覆われる。胸鰭は体側のやや腹側に位置し、先端はやや尖る。腹

鱭は1棘5軟条で、背鱭始部をとる垂線より前方に位置し、胸鱭より短い。腹鱭棘は側扁する。腹鱭腋部には1対の鱭状突起がある。倒した腹鱭の先端は肛門を越え、臀鱭前隆起縁に達する。尾鱭は深く2又する。

**色彩** 生鮮時の体色 (Fig. 1A) — 全体的に銀白色。体背側面は灰色を帯び、暗色の小斑点および不規則な輪状斑が散在し、体側中央に1列の黄色斑点がある。吻や眼前棘、鰓孔後縁の肩帯および胸鱭基底は灰色。鰓蓋上縁は黄色。背鱭基底付近および棘条部縁辺は無色透明で、棘条部前半の中央部から軟条部縁辺全体にかけて黄色帯がある。臀鱭棘条部および軟条部縁辺は黄色。胸鱭基底および尾鱭後縁

は黄色で、腹鱭は無色透明。

固定後の体色 (Fig. 1B) — 頭部および体腹側部が銀色で、体背側部は淡灰色。吻や眼前棘、鰓孔後縁の肩帯、背鱭基底、臀鱭基底および胸鱭基底は灰色。各鱭は無色透明。

**分布** インド・西太平洋に分布し、日本国外ではインド、スリランカ、タイ、マレーシア、フィリピンおよびインドネシアから標本が得られている (Suzuki and Kimura, 2023)。日本国内ではこれまで鹿児島県種子島からのみ記録されていたが (Suzuki and Kimura, 2023)、本研究により鹿児島県南さつま市沖における分布が確認された。

**備考** 南さつま市沖から得られた標本は体高が体長の

Table 1. Counts and measurements of *Equulites oblongus*.

	This study		Suzuki and Kimura (2023)	
	KAUM-I. 213644		Holotype	<i>n</i> = 84
Standard length (mm)	99		63	41–143
Counts				
Pectoral-fin rays	18		16	15–19
Lateral-line scales	Damaged		52	53–62
Scales above lateral line	10		7	8–13
Scales below lateral line	17		17	13–19
Sum of scales above and below lateral line	27		24	22–30
Upper gill rakers	5		4	3–6
Lower gill rakers	10		14	11–15
Total gill rakers	15		18	15–20
Measurements				
As % of standard length				
Head length	27		30	26–31
Predorsal length	42		40	39–44
Dorsal-fin base length	57		55	50–58
Anal-fin base length	46		44	42–46
Distance between snout and anal-fin origin	56		54	52–58
Distance between snout and pectoral-fin insertion	29		29	27–34
Distance between snout and pelvic-fin insertion	37		39	35–43
Distance between pelvic-fin insertion and anal-fin origin	19		17	14–21
Distance between insertions of pectoral and pelvic fins	20		18	16–22
Distance between pelvic-fin insertion and center of anus	7.4		—	5.3–9.3
Caudal-peduncle length	7.5		9.4	8.0–12
Length of 1st dorsal-fin spine	2.0		2.4	0.8–2.8
Length of 2nd dorsal-fin spine	47		Damaged	8.7–55
Length of 3rd dorsal-fin spine	Damaged		Damaged	17–34
Length of 1st anal-fin spine	1.6		2.3	0.9–2.6
Length of 2nd anal-fin spine	33		Damaged	13–41
Length of 3rd anal-fin spine	13		Damaged	10–16
Pectoral-fin length	17		Damaged	15–21
Pelvic-fin spine length	Damaged		8.3	7.7–11
Body depth	43		36	35–47
Caudal-peduncle depth	5.9		5.7	4.1–6.8
As % of head length				
Snout length	32		29	28–36
Eye diameter	28		31	27–38
Pupil diameter	16		—	13–19
Post-orbital length of head	40		—	30–38
Upper-jaw length	37		—	34–39
Length of upper lip	18		—	11–26
Length of exposed area of maxilla	19		—	14–23
Lower-jaw length	43		—	42–51
Interorbital width	32		29	24–37
Body depth	160		119	113–169

42.9%であること、口が前下方に伸出すること、両顎歯が小さく、狭い歯帯を形成すること、頂部および背鰭棘部に暗色斑が無いことにより、イトヒキヒイラギ属および *Photolateralis* Sparks and Chakrabarty, 2015 の標徴を有していた。イトヒキヒイラギ属は *Photolateralis* と比較して、雄では、体側面の透明域（生鮮時）か黒色素斑域（固定後）が三角形か台形を呈すること（*Photolateralis* では連続あるいは不連続の帯状を呈する）、およびグアニン色素で覆われる鰾内壁の透明域が鰾の後縁から前半部まで達すること（雌雄ともに鰾後半部に限られる）で区別できるが、雌では属の判別が困難である（Suzuki and Kimura, 2023）。本標本は頬部が被鱗しないこと [*Photolateralis moretoniensis* (Ogilby, 1912) および *Photolateralis stercorarius* (Evermann and Seale, 1907) では被鱗する（Woodland et al., 2001）]、背鰭第2棘および臀鰭第2棘が著しく伸長する [*Photolateralis antongil* (Sparks, 2006), *P. moretoniensis*, *Photolateralis polyfenestrus* (Sparks and Chakrabarty, 2019) および *P. stercorarius* では著しく伸長しない（Sparks, 2006; Sparks and Chakrabarty, 2019）] ことから、*Photolateralis* を構成する4種のいずれとも異なり、イトヒキヒイラギ属であると判断した。さらに、本標本は胸部被鱗域の前端が間鰾蓋骨と下鰾蓋骨の接合陥入部をとおる垂線を越えること、側線上方横列鱗数および側線下方横列鱗数がそれぞれ10および17であること、体背側面前域の斑紋が輪状を呈する虫食い斑および小黒点で構成されること、臀鰭第2棘が伸長し臀鰭第7軟条を越えることなどの特徴が Suzuki and Kimura (2023) が再記載したワモンイトヒキヒイラギの標徴と一致したため本種に同定された。

なお、Suzuki and Kimura (2023) は本種の尾柄長および眼後頭長を、それぞれ体長の8.0–12% および頭長の30–38% としたが、本標本ではそれぞれ7.5% および40% とわずかに異なる値を示した（Table 1）。Suzuki and Kimura (2023) は、85個体の標本を観察してワモンイトヒキヒイラギの再記載を行っているが、この個体数は同論文内で再記載を行ったイトヒキヒイラギと比較すると少なく（305標本）、イトヒキヒイラギにおける尾柄長および眼後頭長は、それぞれ体長の6.5–12% および頭長の28–44% とより広範囲の変異を示している。このことから尾柄長および眼後頭長の計測値の相違は種内変異であると考えた。

これまでワモンイトヒキヒイラギは、同様に日本近海に分布するイトヒキヒイラギ、ナンカイトヒキヒイラ

ギおよびオキナワイトヒキヒイラギと体型が類似することで混同されてきた（Suzuki and Kimura, 2023）。しかしワモンイトヒキヒイラギは、側線上方横列鱗数および側線下方横列鱗数が少なく、それぞれ7–13 および13–19（合計22–30）であること [イトヒキヒイラギでは11–19 および17–27（合計31–42）、ナンカイトヒキヒイラギでは11–20 および16–26（合計29–43）、オキナワイトヒキヒイラギでは11–17 および17–24（合計29–38）] に加えて、イトヒキヒイラギおよびオキナワイトヒキヒイラギとは臀鰭第2棘が伸長し、多くの個体で臀鰭第5軟条を越えること（越えない）、ナンカイトヒキヒイラギとは胸部被鱗域の前端が鰾蓋縁における間鰾蓋骨と下鰾蓋骨の接合陥入部をとおる垂線に達するか越えること（越えない）で区別できる（Suzuki and Kimura, 2023）。

本種の国内における記録は、Suzuki and Kimura (2023) の種子島のみであり、本研究で用いた標本は本種の国内における標本に基づく2例目の記録かつ九州島沿岸における初記録となる。

## 謝 辞

本稿を取りまとめるに当たり、鹿児島大学大学院連合農学研究科の本村浩之教授には論文執筆の契機を与えていただき、また標本の貸与および小解剖を許可していただいた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアの方々には標本の作製、撮影および登録にご協力をいただいた。以上の方々に謹んで感謝の意を表する。

## 引用文献

- Sparks, J. S. 2006. A new species of ponyfish (Teleostei: Leiognathidae: *Photoplagios*) from Madagascar, with a phylogeny for *Photoplagios* and comments on the status of *Equula lineolata* Valenciennes. *American Museum Novitates*, 3526: 1–20.
- Sparks, J. S. and P. Chakrabarty. 2019. Description of a new species of ponyfish (Teleostei: Leiognathidae: Equulitini: *Photolateralis*) from the Gulf of Oman. *American Museum Novitates*, 3929: 1–14.
- Suzuki, H. and S. Kimura. 2023. Taxonomic revision of the genus *Equulites* Fowler 1904 (Acanthuriformes: Leiognathidae). *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-023-00935-z (Sept. 2023), 71: 213–259 (Dec. 2023).
- Woodland, D. J., S. Premcharoen and A. S. Cabanban. 2001. Family Leiognathidae, pp. 2792–2823. In Carpenter K. E. and V. H. Niem (eds.) *FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 5. Bony fishes part 3 (Menidae to Pomacentridae)*. FAO, Rome.